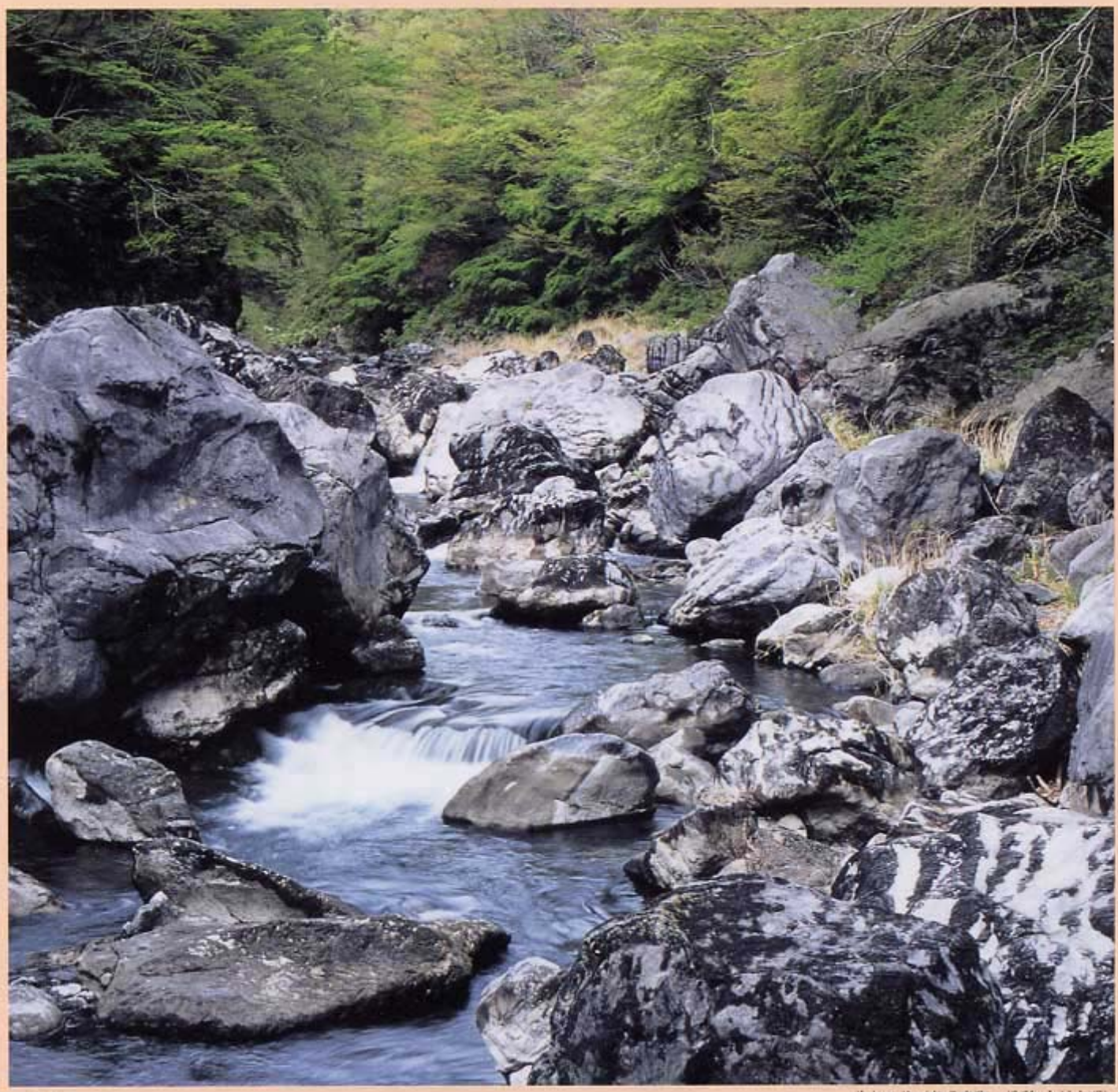
源流の四季

第16号（2005年1月）冬
Winter

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428（87）7055　FAX 0428（87）7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会
印　　刷／（株）サンニチ印刷



憩岳の荒（奥多摩町・撮影 中村文明）

Contents 目次

新春特別対談……2～7
森林再生プロジェクト・モデル林……8
みんなで創ろう 元気な源流を……9
秋の小菅・体験ツアー……9
源流絵図奥多摩版完成……10・11
第5回全国源流シンポジウム……12

新春特別対談

対談者
京浜河川事務所所長　海野　修司
多摩川源流研究所所長　中村　文明

「源流再生・流域単位の国土の保全と管理に関する国土施策創発調査」が環境省、国土交通省、林野庁、文化庁などの省庁連携により、平成十六年十月に開始され、日本の源流域に新しい光が当てられようとしています。その源流再生モデルの対象が村としては小菅村であり、流域としては多摩川です。多摩川の河川管理の責任者である京浜河川事務所の海野修司所長に多摩川に関する歴史や文化など多摩川への思いを縦横に語っていただきました。

台風が来るごとに窓に板を釘で張り付ける

中村　明けましておめでとうございます。本日は大変お忙しい中、「新春特別対談」のために、お時間を割いていただきまして有り難うございます。昨年中は第五回全国源流シンポジウムの開催に当たり、ご支援ご指導を頂き心から感謝申し上げます。

多摩川は市民と河川管理者によるパートナーシップによるいい川づくりが活発に展開されています。今日は、海野所長の多摩川への思いや多摩川の価値や魅力、さらには歴史や文化など様々な角度から海野所長の忌憚のない意見が聞けたらいいなと思っております。よろしくお願いします。

最初に所長自身が故郷で自然や川に接しられた色々な経験がおありでしょうが一番印象に残っていることは何でしょうか。

海野　明けましておめでとうございます。本日は「源流の四季」の「新春特別対談」の機会を得ましたことを大変喜んでいます。年頭に当たり日頃大変お世話になっております流域の市民のみなさんに新春のお喜びを申し上げます。

私は名古屋で生まれまして、生まれた年は昭和三十四年です。丁度その年、大災害をもたらした伊勢湾台風が上陸しました。私自身は覚えていないのですが、小さい頃はよく親から、家の二階まで浸水をして畳を上げたことなど、伊勢湾台風の時の話を聞きました。

中村　去年は台風により全国が大変な被害に見舞われましたね。

海野　去年は観測史上最多の台風が十個も上陸し、死者や行方不明者が八十九名という大きな自然災害に見舞われました。あのころはそういった災害についての恐ろしさと言ったものを親から機会あるごとに聞かされ、そういった文化があったのではないかなと思っています。小さい頃は台風が来るごとに窓に板を釘で張り付けるといった手伝いがありました。家族ぐるみで台風に備える習慣が最近ではなくなったことや災害の恐ろしさといったものがわからなくなってきていることは残念です。

中村　私は生まれが宮崎県ですが、台風の通り道になっていました。上流の都城あたりで七百ミリを超えると大淀川の水位がみるみる上がっていく訳です。自然のエネルギーの大きさにすごく関心がありまして、台風のたびに川を見に行ったことを覚えています。台風でみかん畑が流されましたが、台風を非常に身近に感じていましたね。所長の話にありました伊勢湾台風のことですが、親から子へ生活の中で語り継がれていたと。

海野　そうです。そういったことが重要ではないかと思っております。自然災害の話もそうですし、やはり、昔の人たちはいろいろそういった知恵があって、暮らしてきたんだと思います。暮らしの知恵を次の世代へ語り継いでいくということが大切です。これは社会の成り立ちの根本であって、こうしたことが希薄化してきている。そこからやはり組み立てていかないとどんなことをやるにしても難しいのではないかと思います。

大きなボラを釣り上げ祖母に見せたくて田んぼで転んだ

海野　それと私の近くには中川運河がありました。

中村　それは名古屋の頃ですか？

海野　そうです。当時は真っ黒い油の浮いた運河です。かなり、マイナスイメージを持っていま

海野修司 京浜河川事務所所長

した。一方で毎週のように祖母の実家に帰ってましたが、そこでは田んぼの中に小川があってフナなどの小魚が絶えず泳いでいて、祖母の家の畑でミミズを捕ってすぐ釣りに行くということをやっていました。

小さなフナの群れが泳いでいると網ですくうことができたので、それを甘露煮にしたりというようなことがあって、すごくのどかで楽しい小川の印象を持っています。大きなボラを釣りあげたんで、大喜びで祖母に釣ったものを見せようと思って帰る途中に、田んぼのあぜ道ですから足を滑らせて田んぼの中に転げてしまった。釣りあげたボラを逃がしてしまった。（笑）

中村　大物を逃がしてしまったんですか。

海野　いや、あとで捕まえましたけど。（笑）中村所長は釣りはどうでしたか。

船が上流まで上れるように工夫されていた

中村　春先に天然のアユの稚魚が大淀川を遡上するんです。夕方手作りの竿にカカシラ（毛針）をつけてアユゴを釣りに行くんですが、七本のハリで四匹ぐらいいっぺんに釣れるんです。浅瀬に糸を流すんですが、入れるとゴツンと引きがきて面白いぐらい釣れて八十匹ぐらいあっという間に釣れました。嬉しかったのは、母ちゃんが釣った魚をご飯のおかずにしてくれたことです。子どもながらに自分も家の役に立ったなと思えて。

海野　もう一つは小川の本川の方では、八月の祭りに船が下流から上がってきます。船の上に何段も舞台を設けて、そこに人が乗っかってそこからお餅を川岸へ投げる。それをキャッチするんです。餅取りに行くのが楽しみでした。

中村　海野所長のワクワクした子どもの頃の顔が目に浮かびますね。それは何のお祭りですか？

海野　夏祭りです。その時に驚いたのは、下流から船が上がってきますから、橋をその時に上げるんです。橋を上げて船をどんどんどんどん上流まで進ませていくんです。

中村　すごい光景ですね。川が人やものを運ぶのにうんと利用されていたんですね。舟を通すために橋を上げるんですか？

海野　そうです。橋を引っ張ってあげるんです。船が上流まで上れるように工夫されていました。そういった記憶が残っています。水害の恐ろしさの話と真っ黒い運河とのどかな小川、それぞれを子供の頃経験しました。

中村　所長の話にミミズの話がありましたが、今の子供はミミズを捕まえて餌にするという体験はどうなんでしょうか。

海野　ないと思いますね。

中村　都会ではミミズも居なくなったんでしょうね。だからミ

中村文明 多摩川源流研究所所長

ミズを知らない子どもも多いんでしょうね。

ところで、多摩川の川づくりはどういうふうにつくられてきたんでしょうか。

活用と保存すべきところのゾーニングという考えが導入

海野　多摩川は、首都圏を流れる都市河川として、歴史的に見て、河川行政の先進的な取り組みを刻んできています。現在だけでなく、かなり古くから多くの人が多摩川の価値を見つけてきたといえるでしょう。昭和四十年代から、多摩川の自然環境とその価値に市民の方が注目し、昭和三十八年には「多摩川の自然をとりもどす会」、昭和四十五年には「多摩川の自然を守る会」が誕生して、多摩川の自然環境を守る運動が開始されています。昭和五十五年に、全国の河川に先駆け、環境という概念を取り入れた、まさに川の価値を多面的に捉えた、当時としては画期的な河川環境管理計画が策定されています。

河川環境管理計画は人間が活用すべきところと自然を保存すべきところのゾーニングという考えが導入された画期的な計画です。

中村　多摩川の河川整備計画ができたのが、平成十三年ですからその二十一年前にすでに多摩川の自然環境の保全を視野に入れた計画があったんですね。

海野　そうです。河川環境管理計画は、自然環境の保全と秩序ある利用を目指して市民の意見も反映させながら策定されています。

森林再生の緑のボランティア隊

多摩川を舞台にした市民の経験や実績が河川整備計画に凝縮

中村　続いて河川法が幾度か改正されていますが、どんな内容なんですか。

海野　治水を目的とした近代河川制度は明治二十九年に誕生し、昭和三十九年に治水に利水が加わった河川法の改正が行われ、平成九年に「河川環境の整備と保全」を河川法の目的として位置づけた河川法の改正が行われました。新しい河川法のもとで新しい河川整備計画の策定とあわせ、「地域の意見を反映させること」が義務づけられました。

中村　多摩川では、市民と河川管理者が協働してきましたね。

海野　そうです。平成十三年の三月には過去から培われてきた市民と行政のパートナーシップを土台に、今後の川づくりはどうあるべきかを流域の市民の皆さんと一緒に考え、議論し現地観察会を積み重ねて、関東地方整備局管内では初めての河川整備計画が策定されました。これはやっぱり市民の方々が色々な活動を多摩川を舞台にして繰り広げた経験や実績が河川整備計画に凝縮されたといえます。

戦後最大規模の洪水を治水の目標にします

中村　河川整備では、防護ラインを設定し、多摩川の自然な流れを生かし、河川の利用と保全のルールを定めるなど川づくりの全般が示されていますが、その大きな目玉は何でしょうか。

海野　この河川整備計画は「治水」「利水」「環境」の調和を図った法定計画ですが、その目玉は、一つは戦後最大級の洪水を安全に流せるような整備を行い、流域の市民の生命・暮らし・財産を守ることです。去年の全国的な台風災害を経験して、その責任を痛感しています。

もう一つは、多摩川への理解を深め、価値を共有するため、多摩川流域リバーミュージアム計画を実現することです。多摩川の価値や魅力を広く啓発していくために多摩川全体を博物館と捉え、流域の市民みんなが多摩川の価値を共有し、一つ一つの取り組みを協働の精神で行っていくことが大切と考えています。

対立から対等への変化 長い年月の協働の積み重ねから

中村　市民と河川管理者がパートナーシップをどのように築いていったのでしょうか。

海野　まず、昭和四十年代から多摩川の自然環境の保全について市民と河川管理者がケンケンガクガク議論してきた。そういった中で相手を理解するというところも互いにできてきたんだと思います。対等の関係のパートナーシップが多摩川では他の河川に比べて、確立されつつあ

対談する海野所長（右）と中村所長

る河川ではないのかなと思っています。

中村　今多摩川では、多摩川流域懇談会や多摩川流域セミナーを舞台にして、市民と行政が協働して川づくりが進められています。これも歴史的な産物なんですね。

海野　緊張感をもった対等の関係のパートナーシップにより、どちらもが客観的に議論しながらあるべき姿を求めていくことができているのが多摩川ではないでしょうか。

江戸の住人は塩分混じりの井戸水に悩まされた

中村　全国的に見まして多摩川は、源流と中下流が非常に密接な関係にありますね。東京都の水源林もあるし、都民のための水瓶もあります。この点は如何ですか。

海野　江戸に幕府が開府されたことが出発点になっています。徳川家康がこれまでの領地から江戸に移り、一六〇三年に開府をしました。もともと江戸はすごく住みにくい土地で、海に近いところは湿地帯でした。井戸を掘っても塩が入りますから、玉川上水をひいて江戸の住人が飲む水の供給をしたという歴史があります。当然、食べ物がないとだめですから米を作るための水の供給として上河原堰から水をとって農業用水として稲毛、川崎領の農業用水として二ヶ領用水、あるいは六郷用水を引いた。また、住まいの木材を上流域から供給しました。

流域の視点が多摩川では明治から培われてきた

中村　江戸では、振り袖火事など大きな火災が起きて、そのたびに江戸は大きくなったようですね。

海野　そうです。大量の木材を青梅を中心とした上流域から供給しています。

そんなに木材を伐りだしながら、なぜ森が荒れなかったのか。幕府の天領としてきめ細かい手入れをそこに住んでいる人たちにさせたわけです。そこに住む人たちはそこから発生する生産物は採ることができたんです。森の恵みで生活する代わりに森の維持管理をしていたということが、当時の幕府の天領地のやり方だった。その後、明治になって、官地に編入されてしまったわけです。官地になると規制がいっぱいかかって、結局そこで生活をしていた人は森からの恵みをもらえない形の制度になってしまって、結局その人たちが全くなんにもしないので森が荒れ始めた。逆に黙って木を伐りだして売り払うことがおきる。森が荒れて、土砂流出による取水堰の取水障害とかが起きたわけです。こうした経過を見ると源流の状態と下流の生活が深く係わっていることが分かります。そこで当時の東京の尾崎市長が水源林の確保に乗り出した。その時に始めて流域という単位でとらえ、その視点の行動をしたということではないかと思っています。流域という視点が明治のころから培われてきたということが大変大きな事だったのではないかと思っています。

水辺の楽校は多摩川の自然環境を最大限生かした活動

中村　ところで川崎や狛江など各地の水辺の楽校が活発な活動をしていますね。

海野　この多摩川は狛江水辺の楽校、かわさき水辺の楽校、とどろき水辺の楽校、あきしま水辺の楽校さらに今幾つかのところで登録がなされつつありますけど、いろんなところで水辺の楽校が活動されています。

多摩川の持つ自然環境を最大限生かした形で、川で学び遊べるそういった活動がされています。そこでは地域の方々が本当に主体的になってやっていて、それは大変すごいことだなと思っております。こうした活動に対して我々がどうやってサポートできるかと常々思っています。

中村　子どもたちが幼いときから川に親しむ、子どもたちが体験を通じて川を知るということが、大切だと思います。これからの川づくりの新しい担い手を作る課題にも応えるわけで、環境教育のなかで非常に重要な位置を占めるのかなと思いますけど、その点はいかがでしょうか。

海野　多摩川の価値に気づくということが大変重要です。それをどれだけ多くの方々に気づいてもらうか。多摩川の価値に気づくにはやっぱり水辺にきて気づいてもらうのが一番だと思います。当然そこの場にくるには場や体験の機会を提供する人たちが現れないとできません。

さらに水辺に行ったからといってすぐに気づくわけではなくて、自然と人をつないでくれるガイドがいないと多摩川の価値を共有化できる情報を得られないと思います。その場で体験しているときに教える人もいなければならない。こうした受け皿が重要でその機能を果たしているのが水辺の楽校ではないかなと思います。

流域をまるごと理解する上で源流体験は非常に重要である

中村　実はですね、水辺の楽校の方々が本当に熱心に川の源を知ろう、水の源を知ろう、さらに多摩川を流域一体として理解できるお手伝いをしようという主旨で、源流体験に取り組んでいただいています。小菅村で取り組んでいる源流体験についてのご感想はいかがでしょうか？

海野　現代の生活において、流域全体を理解する機会がなくなったんではないかなと思っております。それは道路だとか鉄道だとか我々の生活スタイルというものが流域とは、まったく関係ない生活様式になってきたことが原因でしょう。我々の飲んでいる水がどこから来ているかわからない人が多いと思います。それはとても残念なことです。

我々の生活の根元である水の循環だとか水に伴う物質の循環だとか、さらに生態系のつながりを知るという事が重要だと思っています。中下流地域で水辺の楽校をやっている人達がそこにどんな生物がいるとか、水がきれいだとかいうことを子供たちに教えて子供たちは理解しますが、我々の生活の土台となっている水循環ですとか物質循環を知るには、その場ではなかなか理解しづらい部分があります。

この循環を知るには源流まで行かないとなかなか理解ができない部分がある。流域をまるごと知るために中下流の方々が源流に出向いて体験することは非常に重要だと思っています。

中村　源流体験は流域をまるごと理解できる機会であり、水循環のあり方が体で実感できるわけですね。源流と中下流が青い糸で結ばれていて、運命共同体なんだという理解がすすむと嬉しいですね。所長にも竜喰谷を実踏調査していただきましたが、如何でしたか。

海野　私自身も文明さんと竜喰谷を一緒に歩いて体験しまして、心に訴えるものがあるし、大変感動しました。

五感に訴えるといいますか、水の冷たさなり、森の香りだとか、目で見た滝の流れやその雄大さですか、それは本当に心に訴えるものがあると思います。価値を発見するということは、気づくということです。

何で気づくかというと心で気づくわけでして、そういった心に訴えるものが源流には非常に多いと実感しました。

感動的な体験を通して豊かな自然に気づいている

川崎とどろき水辺の楽校が去年源流体験を行った際、私もそのスタッフとして参加しました。子どもたちは川の中ではすごく真剣なんですね。それはどうしてかというと流されたら死んじゃうと思っているわけです。（笑）流されたら大変なことになると自分で感じているわけです。

自分で苦労して到着地点に着くとみんなホッとした顔をして、今度はみんなで岩の上から深い淵の中に飛び込んで楽しそうな笑顔がこぼれる。その時、目の前に広がる自然の豊かさをおそらく感じ取っている。心で感じている。この感動的な体験がしやすい環境にあるのが源流ではないかと思っています。

単に水循環のダイナミクスを知るだけでなくて、心が感じる学習ができる場所ではないかと思います。そういう意味が源流体験にはあるんだと思っています。それは川の中だけでなく森の中でもいいと私は思っています。こうした機会を提供していくことが重要ではないかと思っています。

交流が広がればより充実した受け皿が必要です。その受け皿をどのようにしていくかが一つの課題ではないかと思います。受け皿の部分は当然小菅村や源

流研究所が頑張っておられますけれども、できる限り多くの方々に協力といいますか、参加して頂くという形が当然あっていい。地域の方々もそうですし、源流以外の若い人たちが参加することになれば、もっともっと源流に来る機会が増えて、源流での体験や生活を通して感受性が強くなるのでしょう。

源流から流域全体のシステムが理解できる

海野　さらには源流から流域全体のシステムといったものが理解できる。自分のところばかり見ていても分からない、流域という大きなシステムが実感できるし、その中でそれぞれの人たちがどんな位置にあるんだという事が始めて理解できる。

中村　なるほど。源流を体験することが川全体、流域をまるごと理解するのに役立つし、さらには流域全体で自分のおかれた位置や役割が分かるという、非常に大切な指摘をして頂きました。さらに源流体験の支援体制のありかたもご指摘いただきました。

ところで、多摩川では流域の視点を明治時代から育んできた歴史を先ほどうかがいましたが、多摩川の源流が山梨県にあって東京都と県境がある、また直轄区間とそれ以外という問題もあります。今後こうした壁を越えることが大事だと思いますが、如何でしょう。

源流体験教室

既存の枠組みを越えてどれだけ連携できるか

海野　おっしゃるとおりです。

われわれは枠組みの中で行動していますが、そこは上下流の連携に向け既存の枠組みをどれだけ越えて連携ができるかどうかということではないかと思っています。

この連携をより強力な連携にしていく上で接着剤になれるのが源流研究所の役割ではないかと思っています。市民と行政を巻き込んだネットワークの接着剤としての役割を果たしていく。今回の国土創発調査の予算がついてかなり連携する枠組みが進みました。それは小菅村と源流研究所の接着剤としての大きな役割だったのではないかと思います。こうした積み重ねが、長いタームで見れば少しずつ成果を上げて上下流連携が進んでいくと思っています。

源流体験の受け皿から始まった源流研究所は、いろんな機関を巻き込んで、地域の再生を進めるコーディネーターになったのが今回の国土創発調査の事例ではないかと思います。

一つ言い忘れましたけれども、多摩川の価値に気づくとともにその価値を情報発信していくことが重要です。科学的なデータに基づいて価値を発信していく。市民の方々が流域全体でいろんな活動を繰り広げて客観的なデータをとっている。そのデータそのものが価値です。そういったデータに基づいて多摩川の価値を発信していくことが重要だと思っています。

淵や滝の名前や由来がずっと語り継がれてきた

中村　客観的なデータの話が出ましたが、丁度十年かけて多摩川源流絵図三部作が完成しました。源流域の長老達から淵や滝の由来を聞き取り、記録・保存し、次の世代に伝えたいという思いで取り組んできました。

海野　源流絵図奥多摩版が十月に完成し、塩山・丹波山版、小菅版とともに源流絵図三部作が出来上がりましたね。

さきほど科学的なデータに基づいて情報発信する取り組みが大切だと話をしましたが、あとはそこをビジュアル化するということが求められると思います。源流体験しても感受性は人によって千差万別ですから価値についてすごくわかりやすく理解できるようにすべきです。それが情報の共有の仕方ではないかなと考えます。

今文明さんからもらった絵図というのはそういった手法を使ったやり方だと思います。私はこれが気に入っているのは、地元のおじいちゃんおばあちゃんが付けた滝や淵や小字の名前を現地に出向いて調査し、みんなのところに行ってその由来を一つ一つ聞いて記録した。私はまさにそれが文化じゃないかと思う。自分の子どもたちにここの滝はすばらしい、この滝の名前はこうでこんな由来があるのかということがずっと語り継がれてきた。そういう伝承文化がここに生きている。源流絵図にまとめられたことで次の世代に伝え、保存できるわけで大きな意味があると思います。

中村　最後に源流へのメッセージを一言お願いします。

海野　源流は流域の視点、流域が一体となる意味では重要な役割を持っているんだと思っています。源流が今すごく頑張ってもらってますけど、もっともっと頑張ってもらえば流域全体が必ず良くなる。ひいては、社会全体が良くなるという事ではないかと思います。

中村　本日は長時間にわたりありがとうございました。

森林再生プロジェクトが大きく前進

源流域に広がる民有林の多くは、木材価格の低迷により間伐などの手入れが行き届かず荒廃が進んでいるが、この現状を打開しようと開始された「森林再生プロジェクト事業」（日本財団助成事業）が今年度大きく前進した。五月の第一回間伐作業から十一月の第六回間伐作業までに流域の市民二二〇名が緑のボランティア隊として参加、今年度はチェンソー講習会の実施とチェンソーによるステップアップ教室も開催されるなど活気に溢れた意欲的な森林再生事業が展開された。

チェンソーによるステップアップ教室を実施

愛情かけて間伐を

十一月十三日、十四日に行われた第六回間伐作業は、小菅の湯の近くの大久保森林団地と今川森林団地の二個所で実施された。間伐にあたって東京農業大学の菅原助教授から「この山の間伐にあたって森林診断を行ってきたが、一ヘクタールに二千二百本近いスギが植えられている。本来ならば千六百本まで間伐が完了すべき森林である。今この森林は陽が入らないので土が弱っている。保水力が落ちている。愛情かけて取り組めば必ず健全な森になる。雪折れの心配もあるので時間をかけてじっくり間伐したい」との説明がなされた。

チェンソー講習会

より深く林業に係わりたい

チェンソーによるステップアップ教室は今川森林団地を利用して、木下景利さんの指導で行われた。四十年生の大きなヒノキをチェンソーを使って実際に間伐するわけであるが、木下さんからどの方向に倒木するのか、どこをどの程度チェンソーを使って切り込むのかなどの細かい指導を受けて間伐に取りかかった。

四十年生にもなると地面に切り落とされたときの地鳴りは大きく、大地が揺れる体験を参加者は味わった。一旦怪我をすると取り返しのつかない事態を招くことになるので参加者は木下さんの指導に従い間伐に真剣に向き合っていた。間伐の技術力を向上することによってより一層高度な間伐作業に従事した参加者は「これから林業により深く係わりたい。そのためには自らを磨き責任ある緑のボランティアになりたい」と森林再生事業への意欲的な参加を語っていた。

木々の間から光が注ぎ心が晴れ晴れとする

大久保森林団地は、永年手入れが行き届かなかったため、下草の生えない陽の射さない薄暗い森林になっていて、緑のボランティア隊は、間伐インストラクターの講師から間伐方法の講習を受けた後、ノコギリを使ってスギやヒノキを間伐した。

長年放置された人工林では樹間の鬱閉が進み、ノコギリで幹を切り落としても、枝が他の木にかかりなかなか倒れないなど悪戦苦闘しながら一本一本を間伐していた。参加者は「間伐が進むと木々の間から光が注ぐ。スギやヒノキが元気を取り戻しているようで心が晴れ晴れとする」と明るい声で間伐体験の感想を語っていた。

大久保森林団地は、小菅の湯の近くで、源流景観を保つうえからも大変重要な場所となっており、小菅村の青柳振興課長は「将来的には小菅の湯周辺は広葉樹と針葉樹の混交林を目指し、景観的にも流域の市民に楽しんでもらえるゾーンにしたい」と今後の抱負を語っていた。

チェンソーを使っての伐木

アンケート紹介

空が見えると心地いい

昨年参加した時より作業が楽にできたように思う。木が倒れて、木々の間から空が見えるようになると心地よい気分になる。また、村の人と気軽に会話できる雰囲気がいい。

チェンソーでも大変

チェンソーの講習会から一ヶ月余り経っていたので忘れているところもあり、直径が十五～二十センチのヒノキでも倒すのは大変だった。

心身共にリフレッシュ

小菅村に来るたびに村を好きになります。今回はチェンソーを使ってグループで間伐。心身共にリフレッシュできました。木が倒れる瞬間が最高に気持ちいい。いい汗をかけました。

国土施策創発調査　小菅村の取り組み

―元気な源流を創ろう―

十一月十八日に小菅村役場二階会議室で源流再生プロジェクト説明会が開催された。説明会には環境省自然環境計画課から佐藤課長補佐、林野庁計画課からは河野森林計画官が出席し、国土施策創発調査の各省庁の取り組みを解説した。参加した九十名を超える村民からは熱心な質問が出る等盛り上がりを見せた。

よりよい源流に向けて

源流再生プロジェクトは小菅村が発案し、環境省、国土交通省、林野庁などの中央省庁と小菅村などの地方自治体、源流研究所などの全国の民間や市民団体が連携して元気な源流を再生するために国土施策創発調査費を用いて、全国の源流域で見本（モデルケース）となるような取り組みやその基礎調査を行う事業。

源流再生プロジェクトには小菅村内での取り組みとして、源流風土記の作成と源流域の可視化プロジェクト（環境省）・森林再生モデル事業（林野庁）・小菅村悉皆（しっかい）調査（小菅村）・全国源流の郷協議会の発足（小菅村）を行うことになっている。

取り組みを語る佐藤課長補佐（小菅村役場）

全国のモデルとして

環境省の事業は源流域の自然環境、文化や資源に関する情報を時間が経っても風化しないように記録し、源流域以外に住む人にも分かり易いようにGISを利用して情報発信を行う取り組みである。

林野庁の事業は現在、小菅村と源流研究所が行っている「森林再生プロジェクト」事業のノウハウをまとめ、国土保全の観点から、零細で管理意欲が乏しい民有林所有者に変わって森林管理の仕組みを作ることを目的としている。

村としての取り組み

小菅村と源流研究所が中心となるのは小菅村悉皆調査である。これは農林地などを調査し、住民からその実態や意向の把握を行い、活用方法を検討する。全国源流の郷協議会では全国のまちづくりやむらづくりに意欲的な源流域の自治体のネットワーキングを行う。

また、全国源流ネットワークでは全国の源流域で活動する市民団体などの連携を強化する取り組みが予定されている。

今回は小菅村の人に事業の趣旨や内容を知ってもらうことを目的に、源流再生プロジェクト説明会が開催された。説明会には小菅村の村民九十名以上が参加し、源流再生プロジェクトへの関心の高さがうかがえた。説明の後、活発な意見交換がなされた。

好評！紅葉の小菅村

今年度の秋の各種事業で初めて「源流・水干探訪の旅」、「源流・大菩薩探訪の旅」を金曜～土曜にかけて行った。また、「干し柿づくり体験ツアー」や「ソバづくり体験」の体験事業も好評だった。

また、定期的に行っている読売日本テレビ文化センターとのタイアップ事業も金町センターと八王子センターの二センターで行い好評だった。

初めての試み

秋の「源流・水干探訪の旅」と「源流・大菩薩探訪の旅」は初めて金曜日から土曜日にかけて行った。

干し柿作り体験（小菅村）

今年の「源流・水干探訪の旅」は、水干から笠取山に登り山頂での展望を楽しんだあと、一休坂を通って下山した。一休坂付近の見事な紅葉に「すばらしい紅葉だ。こんなすばらしい紅葉は見たことがない」と参加者の歓声があがっていた。

里の魅力に気づく

今年は柿の成熟が早かったので、開催を一週間早め十二月十二日～十三日に十五名が参加し、「干し柿づくり体験ツアー」を行った。

今回の干し柿作りに参加した参加者は、「何度も来ているが小菅村をこんなにゆっくり見たのは初めて」と語った。今回の参加者は里にある柿の木の周りに長時間いたので、小菅村の里の風景をゆっくりと見ることができたのがとても好評であった。

自分でつくったソバ

ソバづくり体験は八月十二日、十月一十一日、十月十二日～十三日に行われた。ただソバを打つのではなく秋ソバの種まき、刈り取りから始めたので参加者は本当に自分のつくったソバを食べることができた。その味は格別だったようだ。

タイアップ事業も好評

読売日本テレビ文化センターとのタイアップ事業も継続して行っている。この秋は金町センターと八王子センターが事業を行った。

十月二十四日～二十五日に行った金町センターの源流探訪の旅では、日原の鍾乳洞を見学した後、倉沢谷を沢沿いの林道を歩いた。二日目は一休坂～馬止の紅葉が見事だった。

二十七日に日帰りで行われた八王子センターの企画は定番の水干を訪ねるコース。今回は「多摩さくら百年物語」の特別企画として行った。笠取小屋につく頃には小雨に雪が混じる寒さとなり、下山後の温泉がありがたかった。

「多摩川源流絵図」奥多摩版が完成

十年かけ執念の源流絵図三部作が出来上がる

山崎進さんとの感動的な出会い

多摩川源流域の淵や滝、沢や尾根等の名称確定と由来の聞き取り調査をもとにした「源流絵図」奥多摩版が平成十六年十月一日に完成した。第二弾の「源流絵図」塩山・丹波山版は、五年間四百二十回の源流行を積み重ねて、平成十一年十二月に完成。第三弾の「源流絵図」小菅版は、二年間、百八十回の調査をもとに平成十四年五月に完成させた。平成六年から平成十六年まで十年間にわたる源流実踏調査と地元への聞き取りをへて、ここについに執念の多摩川源流絵図三部作が完成した。

悪戦苦闘の日々を超えて

奥多摩町の日原川を中心とした実踏調査に取り組み、地元の方々の聞き取りをもとに渓谷に出向いて淵や滝の名称の確認作業を丹念に行った。奥多摩町は自宅から遠く、悪路続きでしかも現場は険しい崖をよじ登ったり、深い淵を泳いだりと悪戦苦闘を余儀なくされた。

しかし、どんな苦労も困難も忘れさせてくれる人との感動的な出会いがあったことが大きな励みになった。特に奥多摩一の釣り名人である山崎進さんに出会えたことが最大の収穫であり、この方の存在なしには源流絵図奥多摩版は完成させることはできなかった。びっくりするほどの記憶力の持ち主で、日原川の上流から下流までの淵や滝に関する名称や由来を克明に教えていただいた。山崎さんは意識して地名を一つ一つ覚えていったというより暮らしの中で自然と体が覚えていったのだろう。

大勢の地元協力者に支えられ

また、日原川大沢周辺のことは、天野曾弘さん、倉沢谷は坂和連さん、川苔川は大野喜芳さん、海沢川は新和雄さん、大丹波川は加藤俊雄さん、峰谷川は原島勝男さん、惣岳渓谷は島崎重男さん、奥平道男さん、鳩ノ巣周辺は佐久間正好さんからそれぞれ丁寧なご指導をいただいた。さらに、日原川では、自治会長の小林操さんの呼びかけで山崎信三さん、原島源治さん、黒沢幸雄さん、原島寛さん、千島国光さん、小林孝さん、原島茂郎さん、大館真さん、山崎崇さんらの協力をいただいた。奥多摩町役場の企画財政課の担当者をはじめ、多くの地元の地区精通者の方々の協力と指導を受けて源流絵図奥多摩版が完成した。

場の特性活かしたユニークな名称

「源流絵図」奥多摩版の第一の特徴は、地形や場の特性を表現したユニークな名称が数多くあることである。戸望岩に対峙すると自然のエネルギーの凄まじさにまず圧倒されるが、本村と隔絶された日原の入り口にあたることからこの名前が授けられたという。ヒカリ石、岩清水、曲がり尾根淵、オッボ滝、男釜、女釜、イモアライ滝、バケモノ淵、アミハリドウ、メメズギャーラ、戸望岩、瀬波、鳴瀬、百尋の滝、四十八滝、獅子の口など一つ一つの場所の特徴を実によく観察して名前が付けられている。ここには、古人の洞察力の鋭さと同時に自然への感謝や愛着、畏敬の念などが色濃く反映している。

人間と自然の深い関わり

第二の特徴は、奥多摩が人間と自然との関わりが極めて深い地域であり、そのことを示す数多くの地名が刻まれていることである。山村の生活は大昔から川や森に大きく依存している。源流域の人々は釣りや山菜取り、キノコ取り、狩猟などで日常的に山や渓谷、森に入り込んでいた。獲物を得るためには、急峻な渓谷や山々にも出かけたが、そこは平坦なところもあればそうでないところもあったという。危険な個所との関わりが多ければ多いほど怪我や不幸な事故も多発したに違いない。ケガや滑落を繰り返さないためにも、事故を起こした当事者の名前を淵や滝に刻んだのであろう。ゼンベイ滝、ゼンダナ淵、キムラ淵、サクガ淵、キンザ淵、お花ドウ、イザエモン淵、オタツが滝、おみっちゃん河原、オヨウ淵、クエモンの大淵、源五郎滝などの名称が確認できる。

源流域の山の仕事や暮らしを反映

第三の特徴は、木材の生産と搬出など山の仕事や暮らしに係わる地名が残されていることである。林道が敷設されたのは戦後のことであり、それまでは木馬道や谷の流れを利用した搬出が多かったが、谷の利用に関して川の流れをせき止めた鉄砲だしがよくやられていた。日原川では三個所で鉄砲出しがやられ、最上流から一番だし、二番だし、三番だしと呼ばれていた。また、木材流しの最盛期の頃、大人の世話をしたという茶坊主や荷物を持ち運びするモチコにからむ茶坊淵やモチ小屋淵などがある。さらには紙すきの材料になったミツマタが近くで産出したことからミツマタ出会い淵などの地名も残っている。

修行や祈り、自然信仰に係わる

第四の特徴は、修行や祈り、信仰に関係する地名が数多く見られることである。聖滝、御供所、精進場、セッチン場、仙人の滝、行者の滝、安穏淵、尼が淵、山王大淵、霧立ち姫、弁天岩、梵天岩などの地名が各地に刻まれている。奥多摩町には、江戸時代以前から山岳信仰の対象地となった天祖山や御嶽山、大岳山など信仰の山が数多くあり、関東各地から信者が参拝していた。信仰の山に行き来する道中に修行や祈りに関する数多くの地名が刻まれたのであろう。

多摩川源流三部作の完成を祝って

特定非営利活動法人
全国水環境交流会
代表理事　山道　省三

多摩川源流絵図三部作が完成した。この絵図づくりのために払われた労力は、事前調査、現地踏査、古老へのヒアリング、さらに確認踏査、そして原稿作成、印刷等を積み重ねると、ゆうに十年の大事業となっている。1999年に第一部作となった「塩山、丹波山版」（H11年12月発行）を最初に見せられた時、全身が総毛立つような感動を覚えた。

「源流に夢とロマンを求めて」とサブタイトルが記されているものの、絵図から伝わってくるものは、作者である中村文明氏の五体を通じた源流の底知れぬ「気」であったように思う。作者は、行政や学者が研究や調査対象とすることもなく、ただ古老の頭の中に伝承されたままのものを、現場と照らし合わせながら、ひたすら記録していく。源流域の過疎化、林業の衰退の中、時間との戦いであったと述懐する。

そして、中村氏を支え、あらゆる場面で力になった多摩川源流観察会の人たちのことも忘れてはならない。この偉業は、ただ多摩川源流にとどまらず、全国の源流で活動する人たちにとっても励みになる。各地で同様のマップづくりが促進されることを望みたい。

源流域の地名を集大成

『多摩川源流絵図』三部作に寄せて

多摩川流域ネットワーク代表
長島　保

このほど、多摩川源流絵図が完成した。一九九九年に、本川にかかわる塩山・丹波山版が刊行されて以来、二〇〇二年に小菅版が、そして二〇〇四年に奥多摩（本川と日原川）版が刊行されたことで、ついに源流三部作が整ったわけだ。この絵図づくり、調査に費やした時間を入れると、おそらく十年に近い大仕事だったに違いない。

ここに描きたされた多摩川の源流域は、東京都の水源涵養林になっていただけに、全く手つかずの自然が広く残されてきた。それだけに、急峻な幽谷や鬱蒼たる森林が発達して、四季それぞれの豊かで、美しい景観を造り出している。

この源流域のあるがままの自然に着目し、その支流・沢筋・滝・渕・尾根・頂きなどを実地踏査し、さらには古老からの聞き取り調査なども加えて、地名とその由来を全面的に明らかにしたという。ときには、「通らず」などと呼ばれてきた人跡未踏の場所へも、決死の調査を敢行したようだ。

その結果、数多くの源流地名が、一枚の大きな俯瞰図に描きこまれたのだ。さらに裏面には、支流や沢ごとに図示された地名が、積年の調査・研究の成果にもとづいて、ひとつひとつ解説されている。そこからは、この地に住んだ人びとの自然への畏敬や愛着、かかわりをもった暮らしや伝承・歴史などが伝わってきて、手にした人の心を揺する。

また、随所に四季おりおりの写真がちりばめられていて、楽しい。この絵図づくりの中心となった写真家・中村文明氏の力作だ。小菅版だけだが、源流散策コースや小菅の湯、宿泊施設などの案内もあって、気がきいている。このような源流域の地名絵図は、いままでに全く類書がなかった。おそらくこれ以上のものも、現れないであろう。最初にして、最後の多摩川源流域地名の集大成といえよう。

第五回全国源流シンポジウムを開催

平成十六年十月二日に東京農業大学百周年記念講堂に於いて第五回全国源流シンポジウム（河川環境管理財団・川崎市助成）が開催された。源流シンポジウムは全国の源流域で行われてきたが、今回は第五回を記念し都市部での開催となった。当日は多摩川の流域を中心に六百五十人が参加した。シンポジウムでは作家の椎名誠氏の記念講演が行われた後、高橋裕氏（東京大学名誉教授）から基調提案があり、同氏をコーディネーターとし、箕輪光博氏（東京農業大学教授）、渋澤寿一氏（NPO法人樹木・環境ネットワーク協会専務）、河村文夫氏（奥多摩町長）、阿部孝夫氏（川崎市長）、恵小百合氏（荒川流域ネットワーク代表）、中村文明氏（全国源流ネットワーク代表）によるパネルディスカッションが行われた。

シンポジウムの開会式では、岩井國臣国土交通副大臣、国土交通省河川局坪香伸河川環境課長、進士五十八東京農業大学学長からメッセージや歓迎の挨拶が送られた。

第5回全国源流シンポジウム
（平成16年10月2日　東京農業大学百周年記念講堂）

山梨県小菅村の廣瀬村長が「源流からのメッセージ」

続いてシンポジウムでは、源流の村を代表して山梨県小菅村の廣瀬村長が、「懸命の努力にも関わらず源流の町や村の前途は厳しく将来に明るい希望を持ち得ない困難な状況が続いている。

しかし、地球環境への関心と注目がかつてない勢いで広がっている。源流域の水や森などの資源は国民生活に必要不可欠である。流域圏に着目して源流の資源を保全する公的な仕組みを作りあげよう」との源流からのメッセージを送った。

生きた川の姿に感動

「日本人の心の源流求めて」をテーマに記念講演を行った椎名誠さんは、世界各地の川や山を訪ねた経験を交えながら、「非常に鮮烈な記憶のある川はラプラタ川だ。思った通りの満足感のある川だった。まず、魚影が濃いということだ。どこも漁師が漁業をしていて舟がたくさん行き来している。生きた川の風景がそこにあった。生き生きとした子どもらしい顔がそこにあった。

日本の川はどうかというと見た目には綺麗だがどんな化学物質で汚染されているか分からない。源流部に廃棄物とか電化製品を捨てる人が大勢いて、自分たちの飲む水の基を汚している。水の循環を考えることが大切である。」と強調した。

水は流域単位で循環している

続いて基調提案に立った高橋裕氏は、「源流の重要性や可能性を下流部の方々、全流域の方々に分かってもらわないと源流の運動は広がらない。日本は「昔前まで生活の中心は川の流域であったが、生活スタイルの変化の中で考え方が大きく変化した。

生活水準の向上の中で失われたものが多い。流域という概念を捨て去ってしまった、あるいは忘れてしまった。自分はどの川の流域に住んでいるのか無頓着になった。水が流域単位で循環しているという意識を失った。明治までの日本人はそういう感覚が大変優れていた。是非自分はどこの水を飲んでいるか知って欲しい。自分の所を流れている川の源流を知って欲しい。

源流は日本の文化の源流でもある。これからの源流をどうすればいいか、大いに発言して欲しい」と訴えた。

この後、「源流の魅力と可能性を語る」をテーマに各パネラーによる活発な意見交換が行われ、源流の様々な資源を発掘し、情報発信しながら上下流連携を一層促進していく事などを確認し合った。

講演をする椎名誠氏

源流の方の感想を紹介します。

心すべき言葉

小泉　守

社会的価値観が都市化にシフトされているなかで源流の存在価値を問うシンポジウムが首都で開かれた意義は大きい。

渋澤寿一さんが、源流域の人々の自然と調和した暮らしに触れながら「源流域の宝物は、景観ばかりでなく人の心である」と語っていたが心すべき言葉であった。

価値観の共有

北都留森林組合　中田無双

私は、山村で生きていくことを決断し、小菅村へ移住して3年。現在は、北都留森林組合で働く、都市からのIターン者である。

シンポジウムでは、源流の村で生きていくことのヒントを求めて参加した。過疎化や、林業の衰退など源流の抱える問題はどこも同じ。山村の生活は厳しい。しかし、上下流域の人々が自然や環境に対する新しい価値観を共有することで、これまでにない新しい道が開けるという希望も持つことができた。「情報」「技術」「価値観」の3つを共有しながら小菅村らしさとは何か、大いに議論し「夢」を語りその未来に向かって歩んでいきたい。

自然環境と景観を守りながら、源流の村民として努力していきたい。

子どもは遊びながら学ぶ

小菅小学校　古家浩子

講演やパネルディスカッションでの子どもたちは遊びを通して学ぶという話がとても印象的でした。

今年の夏に総合的な学習の時間で「源流体験教室」を行い、子どもたちは自然の川を体験した。またわき水を飲み、水のおいしさも再発見しました。そして、ここは「小菅の宝物」だということを知りました。

パネルディスカッションにあったように、子どもたちと一緒に川や山で思いきり遊べるように様々な経験をしていきたいと思います。